

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2014年9月25日（木）

場 所：名古屋キャンパス R棟7階 会議室

テーマ：「衣」について——漢字が表す中国文化

報告者：胡 晓明（中国華東師範大学図書館長，中国古代文学理論学会会長）

通訳者：趙 晴（南山大学非常勤講師）



胡 晓明 氏

「衣」には中華文明の美学が極めて多く含まれている。一枚の衣裳で政治，社会，歴史などを表すこともできるし，文化，思想，芸術などを表すこともできる。「衣」は中華文明の重要な「記号」であり，「含蓄」と「彰顯」という二つの文学的な効能もある。さらに，「衣」には「学習的」と「保守的」という二元の文化姿勢が並存されている。

「黄帝垂衣裳而治天下」（黄帝はゆったりした綺麗な服を着て天下を治める）。即ち，黄帝は無為の姿勢で平和的に，文明的に国を治めるということを表している。それは「礼楽」で国を治める文人が文明社会を取り仕切る代表的なイメージである。

中国人にとって，「文人統治」を行うのはごく自然な権威形成であるため，多くの中国人は子供の時からこのような観念を受け止めていた。彼らは社会の中の優れ者とは文字の表現力が高い人たちだと信じている。この点から言えば，中国文化とヨーロッパの伝統は共通している。西洋文明は聖書など本の神聖さと言葉，文字の力をとて重んじている。彼らは法律を上手に分析，説明できる人に対しても，たいへん尊敬の念を抱いている。それと同様に，中国文明では，エリートの象徴は言葉に精通することである。

最も早く文明舞台に登場した統治者は狩りをする人々で、彼らは松明を持ち、長い矛と弓を手に持っていて、毛皮を身に着けて、武力で天下を征服していた。彼らにとっては「暴力」が第一であった。しかし農耕文明に入ると、「耕織」つまり「衣食」は最も大事なことになっていて、政治も次第に平和的になってきた。黄帝は血なまぐさい戦争と殺戮を止め、綺麗な衣裳を身に着け、話し合い、相談し、分かり合っ、自分と意見が違うものでも受け入れて、平和的に統治した。天下はみんなお互いに仲良く、礼儀正しく付き合うことが基本となった。まさに、衣服を身に着けてから文明は進歩してきたといえよう。従って衣服は形（物質文明）だが、中身（精神文明）に影響し、更に変えることさえできるものなのである。「垂」の一文字で、暴力をしない、血を流さない、民を不安定な状態にさせない、「無為」の静かな姿勢で天下を治めることを表している。ここの「礼」は所謂「政治美学」であるが、「政治美学」が重んじているのは、戦争を平和に変える「温和さ」と、天地乾坤の「文明秩序」である。その「温和さ」は「楽」で、「秩序」は「礼」である。両者とも中華文明の美学を表している。

そして歴代衣裳文明は異民族の風習を取り入れてきた。中世の服装には既に異民族の風習が混じっていた。王静庵は『胡服考』という著書でそれについて詳しく書いている。劉肅の『新語』に「胡着漢帽，漢着胡帽（胡人は漢の帽子を被り，漢人は胡の帽子を被っている）」とあるが、それは唐の貞観年初期に長安では漢人たちが既に胡人の帽子を被っていたという証拠になる。また、『新唐書』に「太宗子承乾，使戸奴数百人，習音学胡人，椎髻……（太宗の息子承乾は家の使用人数百人に胡人の音楽を学ばせて，さらに胡人の髪型も真似させていた……）」という記載もある。異民族の風習を取り入れたことを鑑みると、「衣」には「学習的」な特徴があると言える。

一方で、異民族の風習を取り入れながらも本来の民族地位を守るという「保守的」特徴もある。それは身分の尊厳を認め、守るという意味もあるし、「異物」あるいは「敵方」を受け入れると同時に自分を強くする精神的な特徴でもある。

また、衣服は身に着けるものであるが故に、言葉よりも強い力を持っている。曾繁之の『敦煌曲』に「年年寒食憶中原，還着衣冠望郷哭（毎年の「寒食」という節分に中原を思い，中原の服を身に着けて故郷を眺めながら泣いている）」とあり、『新五代史』に「其人皆天宝時陷虜者子孫，其語言稍變，而衣服猶不改。（その人々は皆天宝の時に胡人の捕虜になった人々の子孫で，彼らの言葉は少し変化したが，衣服は変化しなかった。）」とある。即ち、言語に比べて、衣服は変わりにくいと言えよう。

政治の面だけでなく、文章学としても「衣」には二つの義がある。

一つは「彰顯」，即ち「明らか」の意である。豊富な語彙，明快な説明，誇張した叙述などの方法で，文章の効果を最大限に発揮させることは，鮮やかな衣裳を身に着けて，人々に見せることと同じである。もう一つは「含蓄」，つまり「隠す」の意で，

暗示をしたり、隠語を使ったり、含蓄的に表現するといった方法で、言いたいことを最小限の記述で示すことは、衣服で体を隠すのと同様である。これも文章の一種の美学であり、錢鍾書は同じ比喩にしても、褒めたり、貶めたり、或は喜びを表したり、嫌な気持ちを表したり、表現することが全く異なると指摘している。要するに、全ての物には両面性があるように、修辞も、文章も、文字も、衣服も両面的である。

芸術や文学の中の衣裳のイメージから、「衣」特有の美学が感じられる。そこから中華文明と西洋文明の微細な精神的な相違が分かるであろう。

衣裳の中華美学は政治、社会、歴史などに関わる「大美学」でもあるし、人の心の繊細なところを表す「小美学」でもある。

即ち、一枚の衣裳で世界を表すことができると言えよう。

(文責：趙 晴, 蔡 毅)